
Another one

摩耶 湧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n o t h e r o n e

【Nコード】

N 6 3 7 6 0

【作者名】

摩耶 湧

【あらすじ】

舞台は西暦 二二三四年。

未来の首都「阪都」を舞台に事件はおきた。

そして主人公は 浩 と 伸也。

彼らは普通にどこにでもいる高校生。

普通に恋いをし、普通に遊び、そして普通に好きでもない勉強もする。

そんな彼らの前にある日、女神が舞い降りた。

それと同時に次々を起こる事件。

神は何をさせる為に彼らを作り上げたのか。

神は何故、彼らに試練を与えたのか。

”人”は何故、創造されたのか。

彼らの前に”神”は舞い降りた。

プロローグ

漆黒の闇。

全ての”物”と”者”も、”光”も”希望”も、その”闇”の中へと全てが吸い込まれてしまう空間。

一指しの光も届かない”真”の黒。

その空間に身を置いただけで、例えばどんなに屈強な肉体を持った人間も”光”を失ってしまうであろう。

それほど、深く、深く黒い”闇”。

その”闇”の中に一人の幼い少女がいた。

8歳にも満たない少女だ。

全てを失った”眼”を持ち、”生命”の欠片さえも垣間見る事は出来ない。

それが、あなたには想像できるだろうか？

その少女は”黒”一色の部屋の中、大人4人が座れる程の大きなソファの上で足を抱え座り込んでいた。

一人で。

その”眼”は一筋の光を追い求め、”虚ろ”を彷徨い、少女は微動だにしない…。

少女がこの部屋に閉じこもって四週間が過ぎようとしていた。

最初はたくさんあったコンビニ弁当もお菓子もジュースも日を追うごとに徐々に減って行き、今あるのは、少女のいる周囲に散らばっている部屋いっぱいのゴミ。

食料を平らげるたび、少女は何かを失っていった。

危機感、孤独感ばかりが生まれてくる。

そう少女は思いながらも、きつと母が玄関の扉を開け、「ただいま」という言葉と共に自分に笑いかけてくれるだろう…。

いつか帰って来てくれる…。

その思いだけで一人で過ごしてきた毎日。

母がこの家を出て行ってから三週間で食料は底をついた。

この一週間は蛇口から捻り出す水道水しか口にしていない。生も根も尽き、絶望感だけが少女を蝕む。

そして、いくつの時間が過ぎたのか、少女の頭に響く声。

少女の意識とは関係なく、その”声”は頭に直接響く。

けれど、少女の意識はその”声”に答える事はなく、以前”虚ろ”に眼差しを向けたまま微動だにしない。

「…… た …… け …… わ ……」

少女はピクリともしない。

突如、ガタツという音と共に、壁に無秩序に貼り付けられていた意味を持たないカレンダーが床に落ちた。

「わ…し…… け…… る…」

徐々に近くなる声。

その声は”音”に近いほど、言葉では表すことの出来ない声。

少女のボロボロの体はビクツと、そして少しざわめく。

しかし、以前として、少女の心は”闇”に覆われていた。

その”音”は、はつきりと聞き取れるくらい、少しずつ少女へと近づく。

「私が…… けて…… る」

少女の”眼”にはそつと、小さな光が宿る。

少女の意識は宙に浮く感触に包まれ、意識の先に一点の光が輝き

だした。

「だ……れ……!？」

少女が発したその小さな声は、誰もいない部屋に空しく響く。少しずつではあるが、少女は意識を取り戻そうとしていた。けれど、四肢が痺れて動かすことは叶わなかった。

ハッキリと遠のく自分の意識に囚われながら、少女の”部分”は混沌の深海へと沈んでいく。

「わたしが……た……げる」

朦朧とする意識の中、少女はその声に耳を澄ます。

けれど、彼女の意識は海の深く、深くへと沈んでしまった。

誰も助け出すことの出来ない程深い”深海”の世界へと…。

少女は失いそうな意識でその声へと尚も耳を傾けた。

そして、その声をハッキリと聞いた瞬間、少女の意識は消えた。

深い、”海”の中の”闇”へと沈む。

少女はその声に暖かさを感じ、安心し、その声に全てを任せた。

やがて、幾ばくの時間が過ぎ、少女はソファから立ち上がり、廊下から玄関へと向かった。

そして、その玄関ドアのノブへと手をかけ、外の世界へと飛び出した。

大空いっぱい眩い太陽に怯むことなく、無表情のまま少女は歩きだした…。

そして、少女の”意識”は、先ほど聴いた”音”を連呼していた。

「私が助けてあげるわ…」

と、何度も呟く。

それはまるで、神に操られた人形の様に…。

第一話「モノガタリノハジマリ」

天を翔る剣。^{しんけん}

弧を描き、青い海を泳ぐ一羽の姿。

大空いつぱいの翼を広げ優美に舞う姿。

やがてその大剣は、翼を小さくたたみ地上へと滑空を始めた。

コンクリートで出来た、木々をくぐり抜けると弾丸の様にスピードは跳ね上がる。

8

ある木々の中に降り立ったと思うとすぐに上昇を始め、その足には小さい”何か”を掴んでいた。

そして、再び弧を描き羽ばたく。

賢明に生きる”姿”を、まざまざと見せつける、空の王者の姿。

それを見つめる一人の青年の姿。

青年は”強さ”と”生命”^{いのち}を持つ、その王者の姿に憧れの眼差しを向けていた。

「珍しい。あれは鷹…かな？」

彼の名前は 安藤 浩。

目の前の王者とは反対に青年の姿は”少年”と呼んだ方が合っているだろう。

背は低く、整った顔には愛くるしささえたつてくる。

けれど、その”瞳”だけは、青年の姿を想像させる力強さを誇示していた。

「ん……。そっか？ 鷹ってたしか絶滅した筈だぜ？」

彼の名前は 金原 伸也。

先ほどの浩とは反対に、大人をイメージさせる落ち着いた着き。

そしてスラッとした体軀は身長の高さと相まって、余計に身長の高さを際だたせている。

そして、身長の高さと共に手足も長い。

ちよつとした体格の女性でも包み込んでしまう程の手足の長さはどんな男性諸君も羨ましがるであろう。

そんな全く違う、デコボコな二人。

二人が通学する高校への、いつもの朝の日常風景。

「え？ 鷹って絶滅したわけ？」

浩は鷹から伸也に向かって、顔を向け彼を見上げる。

「なんで知らないかな。 小学校の教科書に載ってる」

伸也はちよつと小馬鹿にしたように浩を見下ろし、右手で顎を触ると目をつむる。

「うーん！？ 確か95年くらい前に絶滅したぜ」

「え！？ そうだったけ？」

「そそ」

一応、書いておこう。

もちろん、この世界の話で私達の世界では、まだ鷹は絶滅していない。

今から約100程前にある事件がこの世界で起きた。

それは人類史上を揺るがす大事件。

鷹はもちろん、熊やイタチ、そして、猫や犬。

生態系のピラミッドの頂点にいる生命体は絶滅と絶滅の危機に瀕した。

同じ鳥類では生命力が強いカラスさえも絶滅した。

そう教科書には記載されていた。

人類史上を揺るがす地球規模の大惨事。

それは、あるウイルスによってもたらされたと教科書にはあった。どこから発生したかは解らないらしいが、そのウイルスに感染した人は死んでも生き返る。

そして、”生命”を持つものを食らう。

どこかの映画のゾンビの様な話であるが、事実、約100年前にそのウイルスは流行った。

それは人類も例外ではなく、その病魔は人の体を蝕み人々に感染を繰り返した。

そしてウイルスの発生源はこの日本である。

日本政府は、そのウイルスが世界に拡散する前にある手段をとった。

その策が功を奏しなんとかウイルスの拡散を未然に防ぐ事が出来たのである。

大多数の日本人の命と引き替えに…。

その大惨事については、又、後述するでしょう。

鷹は絶滅したと教科書には記載されている事は、この世界で事実である。

いつまでも鷹の姿を惜しそうに眺めている浩に、伸也は左手首に
はめた時計を見ながら言ってやった。

「ところで俺達遅刻かも」

伸也は笑いながらいう。

浩は「え？」 という言葉も出せないまま、いきなり夢から叩き
起こされた。

「やべっ!」

二人は鷹の事は全て忘れて、全力で学校へと疾走する。

デコボコで全く似ていない二人だけれど、どこか似ている二人。

この二人から物語りは始まった。

第二話「新学期」

教室からの望むことの出来る窓の外には、葉を薄いピンク色に染めた木々が、我こそが一番綺麗と争っている姿があった。

走っている時は気がつかなかったけれど、教室に入れば落ち着くのか、つい窓の外を眺めてしまう。

”少年” 浩はホームルーム中にもかかわらず、春の陽気に気をとられてしまい、頬杖を突き、ガラス一枚先にある桜の美しさに惚けた。

壇上では、担任教師が何かを言っているが、心を抜かれてしまった少年の耳には届かなかった。

気がつくと、ホームルームは終わり全員が席を立つ。

つい、それも忘れて一人だけ座っているところだった。

「おまえ、ボ～っとしすぎ!」

伸也は席を立つと席の横に来て、きつい一言を放つ。

「ああ、ちよつと眠い…」

「またかよ。 昨日早く寝てねーの?」

「そんなことないけど、なんか眠い」

浩は眠い眼を擦り、両手で頬杖をついて、机の上の端末をいじる。今日の時間割を確認する為だ。

ホーム画面から時間割が表示されるアプリを押す。

ズラツと今週分の時間割が画面いっぱいに表示される。

今日の予定について、今から三十分後に始業式が始まる。

始業式は午前十一時には終了。

それが終わればクラス替えの為、三年生の教室へと向かう。

浩と伸也は今年から高校三年生。

高校生活最後の年。

来年は大学に進学するか、このまま就職するか。

二つに一つの選択肢。

浩と伸也は大学へ進学することに、一応は決めている。

今年受験の年だ。

ちなみに”一応”という言葉は浩の為の言葉。

伸也は元々頭がいいので、このまま問題なく進学出来るだろう。けれど、問題は浩のほうにあった。

小学校の頃から勉強が苦手で、まともに机に向かった事がない。

この高校の受験についても、とても合格は出来そうになかったのだが、伸也が毎日、泊まりがけで「地獄の勉強フルコース」を実行してくれたから、なんとか合格する事ができた。

伸也と浩は家が近所同士で親同士が大親友。

自然とはいかなかったが、二人は友達同士となり、今では”無くてはならない存在”とお互いがなってしまった。

今でも浩は思い出す。

高校受験に合格した時の母の顔を。

浩に「よくがんばった！」ではなく、伸也の手を握って「ありがとう！ ノブちゃんのおかげよ！」と母は喜んでいた。

このまま、無事に大学受験も合格できればと浩は思っていた。

浩は端末の電源を切ると、ICチップを端末から抜き取った。

そして、それを自分の腕時計型の端末に差し込んだ。

伸也も浩と同じように端末にICチップを差し込むと二人は体育館へと向かった。

いつの時代も同じであるが、遙か昔から校長の話は長いと相場は決まっている。

それは、2134年となった現在も同じである。

五分で話せる事を三十分程をかけて、延々クドクドと話す。一体いつの時代になったら、世界から新学期の校長の話が無くなるのであろう。

浩はそんな事を考えながら、終わる事のない話を上の空で聴いていた。

話も終盤に差し掛かり、立っているのも辛くなる頃、背中をつついてくる人物がいた。

そして、一枚の小さく折りたたまれた紙切れをヒョイと差し出す。

それを受け取る浩は、その手紙の主の顔が頭に浮かんだ。

（ ノブか。 ）

伸也は昔からある物が大好きだった。

鉛筆と紙。

今では、あまり使う事がない代物であるが、彼は日常的に使用している。

この世界では、「端末」という物を全員が左手首につけている。

それは浩達の様な学生に限らず、国民全員がその「端末」を左手首につけている。

この「端末」が無いと買い物をする事や、身分を証明する事もできないし、友達に電話する事もできない。

この世界のこの国で生活をしようとすると、「端末」は絶対必要なのである。

彼、伸也はこの端末をいつも持っているが、左手首にはいない。

いつもポケットに入れてある。

そして必要な時だけ、「端末」を取り出す。

彼が愛しているのは、紙と鉛筆であつた。

この廻つてきた、「紙」を見て、彼からの手紙だと連想しない人間は、同じクラスには存在しないだろう。

浩は紙を受け取ると、先生達にはれない様に広げ、中身を見る。そこには、「速報！ 本日のクラス替えにて、大事件あり！ どうやら、同じクラスに…」との事だった。

右手でそれを握りつぶし、そつとポケットにしまい込んだ。

校長の話はやつと終わりを告げ、次に新任教師の紹介へとプログラムは進んだ。

三人の男女の教師が壇上に上がった瞬間体育館はざわめきだった。二人の男性教師と一人の女性教師の姿。

女性教師は今時の若い新米教師といった感じ。

これだけの生徒を前にしても決して怯むことなく、堂々と挨拶をしている。

名前を 斉藤 聖子。

身長は高くもなく低くもなく。

何を勘違いしているのか、シャツの胸元のボタンを大きく外し、胸の大きさを強調している。

男性教師の一人は如何にも熱血体育系の様なガッチリした体格。紙は短髪で腕も太い。

スーツに身を包んでいても、周囲から解るくらいに、その下には厚い筋肉が見え隠れしている。

名前を 近藤 辰夫。

いかにも、強そうな名前である。

そして、もう一人の片割れはまじめな色男といったタイプ。

女性にモテそうなサラサラヘアと高い身長は185?はあるだろうか。

伸也と同じか、ちょっと高いか。

名前を後藤 啓介という。

最後の後藤教師の挨拶が終わると、校内の女生徒は、なにやらざわめきたつ。

浩は当然かという思いと、女はああいう顔に騙されるとか、勝手に想像していた。

気がつくと、始業式は終わりの言葉を告げ、同時にチャイムの音が校内に響き渡る。

体育館を出ると、すかさず伸也は浩に声をかけてきた。

腕を掴むなり、グイッと引き寄せ、ヘッドロックの体制になった。

「おまたせ」。 大事件の事だけだ」

「さっきの、女教師の事か？」

「ちがいます。残念！ 知りたい？」

焦らすやり方は伸也の常套手段だった。

引っ張るだけ引っ張っておいて、結局何も無い事も多々ある。

「又、偽情報じゃ…」

「あのな、確かな情報なのよ。そんな嘘誰が言った？」

「お前」

と最後まで言い終わる事が出来ないまま、誰かに当たった。

「キャッ！」

三人はそのまま倒れ、校内のエントランスのタイル貼りの上に将棋倒しの様な形になる。

「ごめん！」

誰に当たったかは解らなかったが、声は女子の声色だったので、浩は急いで立ち上がり、声の主の肩を掴み座り起こした。

その彼女を見て、浩は凍り付いた。

ヒラヒラのウェーブがかかった美しい髪に色白の肌。

睫毛は長く、その容姿はどこかのお姫様の様に光り輝いている。

浩はこの人物を知っていた。

「ごめん！　大丈夫だった？」

伸也の事なんかそっちのけで、浩は彼女を助けた。

彼女は腕から倒れたらしく、なんとか顔に傷はなかったが、右腕の肘から小さな擦り傷が見えた。

「ううん。　大丈夫。　私もよそ見していたから」

澄んだ声色と容姿が合っているなと浩は改めて思った。

「あ…その情報の本人…」

伸也はそういうと頭を掻きながら、そう呟いた。

第三話「不均等」

彼女の名前はかしもと櫛元 美歩。みほ

透き通る肌と栗色の髪。

まるで、どこかの国で職人が精魂込めて作り上げた、人形のような容姿と顔立ち。

それが、彼女だった。

「…私こそ…ごめん」

申し訳なさそうに謝る美歩は、右手を口元に当て今にも泣きそうな表情のまま浩に謝罪した。

「いや！ 俺の方が悪いから…」

美歩を立ち上がらせると、浩も立ち上がり伸也を見る。

「そうだ！ 浩が悪い」

「…おまえだろ」

二人のやりとりを聞き、美歩はクスツと笑う。
美歩の元気な姿を見て、一安心する浩。

気がつくとも周囲にいた大勢の生徒はかなり減っていた。
早く教室に行かないと、と浩は伸也を急き立てる。

二人が歩き始めたが、美歩はそのまま立ちつくしたまま、その場所
所にいた。

「あれ？ 教室に行かないの？」

「うん…。 私はちょっと職員室に用事があるから」

「そつか。 じゃ！」

浩は残念な気持ちと少し伸也に感謝をした。

彼女の事を好きな男子生徒は多い。

それは先程も説明した通り、彼女はかわいくて大人しい女の子。
そんな彼女の事を嫌いな男子生徒はいるはずがない。

けれど、彼女に決まった男子がいるという噂は聞いた事がなかつ
た。

その理由を浩は知っていた。

自分達がこれからお世話になる三年生の教室。

その廊下には自分のいくべき教室を探している生徒が大勢いた。

この学校は進級すると、クラス替えがあるのだが、目的の学年教室の廊下にクラス替え表が貼り付けてある。

その表から自分の名前を探し、決められている教室へと向かう。

三年生の教室は全部で六クラス。

一クラスの人数は四十人で三年生の生徒数は、二百四十人となる。その人数の中から、自分の名前の一個を捜さなければならぬので狭い廊下では、このごったがえしの押しくらまんじゅう状態になってしまうのだ。

「ノブ！ 見つかったか？」

「いんや！ 見つからぬー。となりのクラス表だな！」

伸也がそういうと、浩は隣のクラス表目指して突き進む。

浩は背が低い為、自分の現在位置が掴みにくい。

周りの生徒が壁になって先が見えないのだった。

だから浩は伸也が進んでいく道を、後ろからついて行く方法をとった。

そして、隣のクラス表を見つけると、すかさず、浩は自分の名前を見つけた。

人混みをかき分け、目的の教室へと進む。
教室の前のドアが開いているのを確認した。
力一杯、その目的地へと向かった。

ドアをくぐり抜けると、教室には数人の生徒が既に教室内にはいた。

息荒く、黒板に貼り付けられた座席表で自分の席を確認する。
目的の席につき、椅子を引くと伸也が教室に入ってくる姿が目に入った。

「あつ！ ノブも同じクラスか？」

「そそ」

伸也も浩と同じ工程を繰り返し席へと着く。
彼の席は、浩の座った席のちょうど左側。
その間には女子席を挟んで隣り同士であった。

何故か伸也はニヤニヤしながら、浩を見ている。

「なんだ？ 何か顔についてるか？」

「いんや。 なんでも…」

伸也と話しようかと、体の向きを伸也へと向ける。

それと同時に教室の後方のドアが開く音がした。

浩はそちらを見ないで、伸也と向き合うと以外にも伸也の方から浩へと話かけた。

「いんやー。うれしいね」

「なにが？」

「なにがつて…。すぐに解るよ」

「なにをわか」

突如、浩の視界に何かが立ちはだかり、伸也の姿が消えた。

「え…」

その壁の壁を見上げると、そこにはロングヘアーの女生徒の姿があった。

「なんだ？」

彼女の名前は青井 優。
如何にもきつそうな口調。

その口調通り彼女はツンケンしたイメージが浩にはあった。

彼女は先程の美歩とは無二の大親友。

榎本のいるところに青井ありと言われるほど、美歩と彼女はずっといる。

ちょうど、浩と伸也の関係と同じである。

優は背が高くて美人。

それはこの学校で一、二を争うほど。

美歩と優は宝塚歌劇団の様なイメージでこの校内では通っている。

男優役の優と女優役の美歩。

二人がいれば、絵になるであろう。

「そういえば、さっき美歩に怪我をさせたそうだな？」

浩はギクリとした。

唐突に本題を持ち込む彼女。

どういえば彼女が怒らないか思案中、そこに伸也は入ってきた。

「いやー、そうなんだよね。　ちょっと二人で遊んでたら、前にいた榎本に気がつかなくて、ぶつかっただんだよね。　いやーごめんごめん」

「そうか。　美歩の怪我也軽かったからよかったけど、気をつけろ」

彼女は伸也と浩のほうは見ず、答えた。
どうやら、彼女もあまり言いたくなかったようだ。

「ごめんな」

浩も謝ると、優は何も言わず席へとついた。

そこに、その問題の彼女が教室内へと入ってきた。
美歩だ。

彼女は伸也隣の席へと着くと、「宜しくね」と伸也に一言挨拶をした。

伸也は嬉しそうに挨拶を交わすと浩のほうへと顔を向ける。

いかにも羨ましいだろと言わんばかりだった。

浩はそんな事も気にせず肘をつき、只黒板を見つめていた。

「残念だったな。 美歩が隣りじゃなくて」

浩は何も言わず、端末の電源を入れた。

ICカードを差し込み、起動させる。

浩は先ほどの手紙の内容を理解した。

伸也は知っていた。

この二人と同じクラスになることを知っていたに違いないと浩は確信した。

浩がそう思うのと同時に教師が入室してきた。

入室してきた教師は担任教師ではなく、先程壇上で演説していた校長先生の姿であった。

体育館での校長先生は遠くてあまり印象は無かったが、こうして間近でみると風格がある。

太っつてはいるが太りすぎではなく、丁度年齢通りの体格を携えていると言ったほうがいいかもしれない。

校長は挨拶をすると、担任の教師の紹介を始める。
入室して来たのは、後藤 啓介の姿だった。

この後藤が高校生活最後の教師となるのである。

「はじめまして！ 先程も挨拶をさせていただきましたが、君達の担当教師となる後藤 啓介です。 宜しく！」

黒板に自分の名前を書くと、後藤先生は軽く自己紹介を始めた。

生まれは名古屋。

趣味は読書。

特技は料理。

まさに絵に描いた様なモテる条件を持つ教師。

女子生徒は紹介を始めた担任教師にチャチャを入れる。
ほどよく、教室内はにぎやかになった。

そして、校長が退室すると後藤先生は各自生徒の自己紹介を求め、
それに答えた。

第四話「白壁」

学校での今日の予定を消化し、下校中にコンビニでお菓子をかう
浩と伸也。

まだ、昼にもなっていないのに育ち盛りの少年達の腹はグウと音を鳴らす。

若人は、食べても食べても沸き上がる無限の食欲に完敗し、今は目の前の食料にありついた。

「やっぱ買い食いはうまい！」

元気よく宣言をする浩に呆れる伸也。

二人は腹を少しだけ満たし、家路を急ぐ。

ふと、浩は先程の二人の事を思う。

榎本美歩と青井優。

彼女達はとても綺麗で、少なくとも浩が知っている情報では付き合っている生徒はいない。

その情報がどこまで正確かは解らないが、いるという話は聞いた事がない。

彼女達はいつも一緒にいる。

ちょうど、浩と伸也の関係みたいに。

彼らには一緒にいる理由があった。

浩と伸也は小さい頃からの幼なじみ。

浩が五歳の頃、伸也が隣りに引越してきた。

浩の父親と伸也の父親は古くからの友人同士。

その縁もあって、伸也の父親は安藤家の隣りに引越すことを強く希望したそうだった。

だったというのは、浩もその事については父親には深く聞いていない。

というのも、伸也に少し問題があつて父親が浩を伸也の友達にしたいという強い思いがあつたそうだ。

二人が親友同士となつてもう、十二年の月日が経っていた。

ピンポン

インターホンを押すと家の中から電子音のチャイムが鳴る。

それと同時に浩の母親の甲高い返事が家の中で反響する。

二人は玄関を開けるとリズムのいいスリッパの音がパタパタと鳴った。

「二人とも、お帰り〜。 お昼ご飯出来てるわよ」

「おばさま、只今、帰りました」

のんびりとした浩の母親の言葉に、きちんと返事をする伸也。

浩は靴も揃えず、返事もせずダイニングへと一直線に向かった。

「コウちゃん、ノブちゃんを見習いなさい」

「だって〜ハラペこだし。 今日の昼ご飯は何？」

浩は鞆をダイニングテーブルの横に置き、椅子にドカッと腰を降ろす。

対する伸也はソファに腰を降ろし、その横に鞆を置いた。

「今日はコウちゃんとノブちゃんの好きなカレーよ〜。 早く手を洗ってらっしゃい」

母はおっとりと二人に返事をする。鍋を両手に持ってダイニングテーブルに置く。

母の言葉に二人は、はいと元気よく返事をした。

「今日もおいしそうですね。 京子さんのカレーはおいしいから」

「あら、ノブちゃんお世辞がうまいわね。 今日のカレーは普通のじゃなくてカツカレーよ」

伸也は浩の母親の事を「京子さん」と呼ぶ。

もちろん、自分の母親ではないのでお母さんとは呼ばないが、それでも伸也的には精一杯親しみを込めて呼んでいる。

両親の親友とはいえ、他人の子供の世話まで、浩の母親は喜んでしてくれていた。

彼の両親は共働きで、家に毎日いない。

というのも、父親は超有名な建築デザイナーで母親は超有名なインテリアデザイナー。

二人は共に世界各国を飛び回り、家には半年に一回程しか帰ってこない。

そんな彼の家庭の事情で伸也は、安藤家に食事と、毎晩のお風呂をお世話になっていた。

これも両親同士が仲がよいおかげである。

そんな彼の家庭事情に浩は「ノブもこの家に住めばいいのに…。わざわざ自分の家に帰らなくても…」と言ってくれていた。

しかし、伸也は他人の家にそこまでお世話になる事に甘えなかった。

伸也はしっかり者の男なのだ。

風呂を上がり、バスタオルで頭をグシャグシャと乱暴に乾かす浩。さっそく冷蔵庫を開け、中からお茶を取り出しコップに注ぎ一気に飲み干した。

「やっぱり、風呂上がりの一杯はうめ」

「お前はおっさんか？」

伸也はそういうとバスタオルを持ち風呂へと向かった。

廊下へ姿が消えたかと思うとヒョイと再び顔を出し浩を見た。

「あっそうそう。 今日からフルコースを又始めるから、まだ寝ないように」

念押しで浩に伝えると、あーいという返事を空で聞き、伸也は再び風呂へと向かう。

浩はソファに腰を降ろし、テレビの電源を入れた。

ニュース番組では今日の事件や政治について放送している。

西暦2134年になった今でも殺人や詐欺、強盗は無くならない。何が人の中で、その様な衝動を作り出すのか、それは今になっても研究されている。

過去の人間達は”人”を創造する為、色々な研究に人生を賭けて

いった。

けれど、”人”を作り出すどころか”アンドロイド”を作り出せてはいない。

過去の文明は今より速い速度で急成長していたと聞く。しかし、ある日を境に人類の成長は鈍化を迎えた。

浩がそう考えた、ちょうどその時、画面に白く無機質で、超巨大な建造物が映し出された。

建造物というにはかっこよすぎるが、見た目には”大きな建築物”に見える。

”それは大きな白い壁の固まり”

その巨大な壁は、望遠レンズで遠方から映し出されている為に、巨大な建築物に感じる。

白い大きなコンクリート壁が、何十枚、何百枚と連なり地面に突き刺さっていた。

その”壁”は何かを囲む様に列をなす。

建築物の中央からは、巨大なビル群が何十本と突き出ている光景。

浩は今でも思う。

本当に人類が、この大きな建築物を造り出したのかと。

同じ陸続きの過去の大都市で、何があったのか浩は知らないが、学校で勉強することや、大人達の口伝えの話では「人が生き返った」という事だけは教えられていた。

そして、今でも死者が蘇り続けていると…。

浩はテレビを消すと、自分の部屋へと帰る。

さっき伸也が言った言葉など、頭の片隅には微塵も残さず布団へと入り込む。

気がつけば、浩の意識はこの世から遠ざかっていた。

断章 「院生」

紅に染まる空。

夏のジリジリとした暑苦しい空気ではあるが、麗奈は夏の夕焼けが大好きだった。

大学の研究室で麗奈は、一人研究に没頭しているが、この夕方の一時だけは、この壮大な”絵”について見取れてしまう。

ビーカーやフラスコが所狭しと置かれているが、整理整頓は行き届いていた。

十二畳くらいの大きさの部屋の中には彼女一人しかない。

窓側に置かれた机に開いたノート。

彼女は腰掛けシャープペンシルをクルクルと器用に回しながら景色を眺める。

天気の良い夕方、この”絵”を眺めるのが彼女の習慣になっていた。

カーテンは陽が落ちるまでずっと開けたまま。

部屋は朱色に染まり、不思議な色を作り出していた。

ガチャツと部屋のドアが開き、”絵”に見取れていた彼女はビクツとした。

「やあ、まだ居たのかい？」

彼の名前は齊藤 京滋。
さいとう けいじ

三十歳という若さではあるが、教授にまで登り詰めた天才。遺伝子研究の世界で彼を知らない者はいない。

「ええ。なんか夕日が綺麗で……」

「ん。 そうだな」

そう言っ て彼は彼女の隣に着き、机に手をつき一緒に夕日を望んだ。

彼は二十六歳の時、人遺伝子の解明されていない残り二十%を解明した。

もつとも解明困難とされる二十%は彼の作り出した公式により、あっさりと解体されたのだった。

そして二十八歳の時、教授なる。

丁度その年、彼女　麗奈は大学院生になった。

「こんな綺麗な景色も、いつかは人間が作り出せるのかしら？」

「人間が、こんな綺麗な世界を作り出せるとは思えないね」

教授として初めて教壇に立ったとき、彼はたくさんの生徒の中から、すぐに彼女を見つけた。

その瞬間、途端に彼女の姿が^{まぶた}瞼に焼き付き離れなかったと京滋はよく麗奈に話していた。

眼鏡をかけ、頬杖を突きながら京滋の講義を聴く麗奈。

只、それだけの姿。

講義が終わるとすぐに、彼女の席へと京滋は向かった。

彼女は何がなんだかという感じで、気がつけば京滋がすぐ目の前に立っていた。

「…そうかな。　だけど、いつかは作れる様になるといいな」

京滋は気がつくと彼女に告白をしていた。

もちろん、教室内はざわめきたった。

「そうだな…」

彼女の返事はOKの一言。

それ以外には口には出さなかった。

「いつかは…」

その日から学部内は、二人の話で持ちきりだった。
若き天才教授と院生との交際。

そんな事を周囲は黙っている筈がなかった。

噂は噂を呼び、院生の間だけでなく各教授達にも噂がたった。
そんな噂に麗奈は只、黙っているしかなかった。

京滋は彼女の横顔を眺めると急に愛おしくなり、そっとその顔に
キスをした。

突然の不意打ちに彼女は面くらい、驚きを隠そうと必死で頭をフ
ル回転させた。

「ん…、そう…だね。 あっそうだ今日は先に帰るね」

そういうのが先か、彼女はノート閉じ、鞆にしまうとイソイソと
研究室の扉へと向かう。

「昨日寝てなんだから、今日は早く寝ろよ」

京滋はそう声を掛けると、彼女は黙って頷き部屋を出た。

昨日は研究室で泊まり込みで一人研究結果をまとめていた。
一ヶ月後に控えている論文の提出期限が迫っている為だった。

麗奈は研究室を出ると、扉にもたれ掛かりフウーと一息つく。心臓が飛び出てきそうな早さで脈打つのがわかる。急ぎ足で校舎を出ると、外の空気に触れ少しは落ち着いた。

京滋はいつも突然にキスをする。

麗奈自信、それは嫌いではないが…。場所を考えてほしいと考え込む。研究室に二人きりだとわかってはいるが、公衆の場での行為に対して、麗奈は少し嫌悪感を感じた。

論文の事などすっかり忘れて、その事ばかりが気になる。こんな事件で動揺することに、麗奈は少し腹立たしさを感じ、キャンパスを少し歩く事にした。

およそ三歩……。

たった三歩進んだだけだが、ある一人の人物が目にと止まった。

目の前に本を持った、人物が通りかかった。

辞典のような本を、両手で顔まで数センチで当たるといふような距離まで近づけて凝視する院生。

よっぽど集中しているのであろう、フラフラと蛇行しながらこちらに向かってくるかと思うと、あさってのほうに進んだりもする。

麗奈は危ないかと、心で呪文の様に言葉を唱え、その人物に悟そうと行方を見送った。

案の定、”本を凝視する人物”は校内の一角にある立ち木に衝突した。

ウツという呻き声と共に、分厚い本のドサツという音が周囲に響いた。

周囲に他の院生はいないので、自分だけが目撃した突然の事故。麗奈は急いで、その男の元に駆け寄る。

本を拾いあげると、男の隣りに置きその肩へと手を当てる。

「大丈夫ですか？」

「イタア」

この時初めて麗奈は気が付いた。

”本を凝視する人物”は男性であり、外人だという事を。

エメラルドグリーンの瞳に白い肌。

髪はアジア人特有の黒髪に少し金色が入っていた。

とても、分厚い本を読みあさる男には見えない。

よくてナンパ好きなハーフ外人といったところだ。

男は何が起こったのか解らないのか、手の平をおでこに当てた。その指の間から血が流れ出ていた。

「キャッ！ 本当に大丈夫ですか？ 救急車を呼びましょうか？」

「あ いや、たぶん……大丈夫です……」

「だって血が」

「え？」

男は手のひらについた血を見ると、顔面蒼白になり、卒倒しそうになる。

麗奈は迷わず、携帯を取り出し救急車を呼ぼうとするが、男の手で遮られた。

「いや、やっぱり大丈夫です。大袈裟過ぎました。すいませ
ん」

「だって血が。それに大袈裟な怪我だし！」

麗奈は鞆からハンカチを取り出すと、男のおでこに当てた。

「ありがとうございます……。ところで眼鏡見かけませんか？
たか？」

麗奈が周囲を見渡すが、眼鏡らしき物は目に入らなかった。

「見あたりませ」

そう言おうとした時だった。

自分の下で、何かがパキッと音を立てた。

もしやと思い立ち上がると、そこには無惨な姿になった眼鏡がある。

「キャッ！ あたしったら すいません！」

「え… あ。」

「だけど そんな……。 どうしよ」

麗奈は残骸になった眼鏡を拾い上げオロオロとする。
そして、一つの名案を思いついた。

「そういえば、視力はいくらですか」

「え…？」

「私、予備の眼鏡を持ってるので、眼鏡を弁償するまで、これ使ってください」

そういうと、鞆の中から予備の眼鏡を取り出し、男へと渡す。
朱色の縁の眼鏡をひと通り眺めると男は自分にかけてみる。

「君、視力0.2……だよな？」

「え…、そうですが…」

「そっか。僕も0.2だから、よかった」

「偶然！ よかったわ。新しい眼鏡が作れるまでそれ使ってください。私が弁償しますから」

「いや、そんな悪いよ。よそ見してたのは俺だから…」

「駄目です！ 壊したのは私だから弁償します！」

「いや…」

そんな譲り合いの応酬。

どちらも引かない、変な譲り合い。

ずっと続くかに見えたエンドレスな闘いは意外な決着を迎えた。

「わかった。えっと…、僕の名前はレオ。レオ＝エイプリル」

そついうと彼は彼女に右手を差し出す。

「あ、わ…私の名前は麗奈。波賀 麗奈といいます」

麗奈もそれに合わせて、レオと握手をする。

「じゃ、眼鏡が完成したら教えてください。大体いつも図書室にいるか、昼は学食にいますので…」

「…あの、携帯の番号教えて」

連絡を取るには当然か、携帯電話の話をするとレオは少し怪訝な顔をした。

「ごめんなさい。俺、携帯持ってないんです」

「そッ！ そうなの！？ 今時そんな人がいるんだ！？」

「ええ。携帯電話とかあまり好きではないので」

「解りました。じゃ、昼に学食に行くので、その時に渡します」

それを聞いたレオは頷くとお互いにじゃーという挨拶を交わし別れた。

これが、二人の初めての出会い。

第五話「陸上部」

桜、咲く咲く。

教室から見える校庭の桜はまだ、散る気配は無く、まだまだ若い姿を人々に見せつける。

桜の薄いピンク色の暖かい色は、人に”陽気”を与える。

その”陽気”は、ある少年を元気にさせた。

誰しもあるだろうか、気持ちがいい季節に気分はどこまでも上昇気流にのる。

そんな時は人に何を言われても気にならない。

「へ」。 機嫌が良さそうだな？ 少年よ」

「そうだな。 春という季節は人を陽気にさせる」

「ほほう。 春の陽気というか：昨日、勉強サボって早く寝たから元気になっただけだろ？」

伸也が浩に冷たい視線を向ける。

がしかし、この少年の気分は落ちなかった。

「へっへ」

そう、何を隠そう、彼らは受験生。

今年は大学を目指して受験戦争になんとしても勝利しなければならない身分だった。

「だつてさ。眠かつたんだもん」

「開き直るなっつーの」

伸也はサラツというサラツと席に着く。

端末の電源を入れると自分のＩＣカードを強引に差し込んだ。

途端にキーボードをカチャカチャとタイピングしだすと、浩の端末はピピツとアラームが鳴る。

それは目の前にいる伸也からのメールだった。

浩も自分の端末にＩＣカードを差し込むとメールソフトを立ち上げ、その内容を確認した。

メールには文書ファイルが添付されていてそれをデスクトップに移す。

何かと思いファイルを立ち上げると…。

「げええ！こ、これはッ！」

「フフフッ！そうだよ！君の大嫌いなテストだよッ。しかも、ノブ君特製のテスト用紙。もう寝れると思うなッ」

しか

浩はその内容に驚愕を覚えた。
テスト問題が二十枚添付されていた。
その多さに浩は卒倒した。

「ほう。 勉強するき満々だな？」

突然、浩の後ろから担任の後藤が顔を覗かせる。

「勉強する事はいいことだ。 けれど今は授業が始まろうとしているので、それは休み時間にでもするんだね」

という台詞を残し、後藤はさっさと教壇へと着く。

浩はノブ特製のテスト用紙を保存し教科書を画面に展開させた。

早速授業が始まった。

伸也は浩に舌をペロツと出す。

頬杖をつきながら授業を聴くが、浩は授業内容は頭に入らなかった。

放課後。

クラブ活動の為に浩と伸也は部室へと向かった。校庭の外周沿いに建てられたコンクリートブロック作りの部室。その部室の周りには野球部の備品が所狭しと置かれている。といっても二人は野球部ではない。

陸上部の部員だ。

この部室は野球部と陸上部が使用している。

長方形の部室の三分の一位置にカーテンにより間仕切りがされていた。

毎年、部員の数でこのカーテンの位置は微妙に移動していた。大体、どこの学校に行っても陸上部より野球部の部員数が多いと思うが、この学校も例外ではない。

未だかつて、カーテンの間仕切りは三分の一からほとんど動いたことはない。

扉を開くと独特の汗くささが鼻につく。

ちなみにこの部室には扉が一応二つついている。

一つは野球部に、一つは陸上部に。

形上では二つの部室になっている。

部室に入ると早速、ユニフォームへと二人は着替えた。

「昨日始業式で、早速、部活動とは俺らも忙しい事で」

「そんな事、言わねーの。今年で最後だし」

「なんだ、浩、卒業するのが寂しいのか？」

「うーん！？ どうだろ？ 寂しいっちゃ寂しいし、寂しくない
と言えば寂しくない」

「どっちだ…」

そんなことを二人が話している内に、後輩達は次々に部室に入り、
着替えて校庭へと集合していった。

二人は急いで校庭へと集合した。

この、陸上部の部員数は十一人。

浩を含めた、男子生徒が五人。

残りの六名が女子陸上部員である。

一年生が五人、二年生が三人。

そして、浩達三年生が三人。

三年生で男は浩と伸也の二人だけ。

あと一人は女子である。

この部は比較的、他の部と比べても女子の比率が高かった。

急いで集合の校庭に出入りする為の会談へと向かう。

後輩達の並んでいる姿の奥に、今までの顧問とは違う姿が見えた。

後藤先生だ。

二人が息を切らし集合場所に集まると「おう」と後藤は声をかける。
る。

「今期から担当顧問になった後藤だ」

「あ、あれ？ 萩田は？」

萩田先生とは、今までの顧問。

「安藤、先生を呼び捨てで呼ぶな…」

浩は慌てて、萩田先生と言い換える。

「まあいい。萩田先生はバスケット部の顧問になった。出産で育児休暇をとってる伊東先生の代わりに。で俺が陸上部の顧問になったわけ。ちなみに俺も学生時代は陸上部だったし、都合がいのよ。あッ！先生は一応、インターハイ出場経験者だから！」

部員一同はええ！嘘だ！とか口々にクレームを出す。

浩は後藤先生はどこか堅そうな性格のイメージを感じていた。それは今まで笑った顔を見ることがなかったからか、それとも後藤先生から発する堅いオーラか…。

「じゃ、俺と勝負する？」

浩はいきなりな申し出を試してみた。

「お…。の、望むところだッ！」

それに負けじと、後藤は勝負を受けた。

かくして、二人の勝負は始まったが、その勝負の行方を語らずとも、勝負の行方はわかっていただけである。

第六話「女神と悪魔」

陸上部での練習も半分を過ぎ、時間は十七時を過ぎようとしていた。

季節は春だけれど、陽が落ちようとするれば、まだまだ気温は低くなる。

浩は風邪を引かないように、ジャージを羽織った。

伸也はまだ練習を止めようとしないので、各部活を少し覗こうと、浩は校庭を歩き始めた。

校庭では、大半のスペースを野球部が陣取っているため、浩達陸上部は校庭の外周沿いを練習スペースとして使用している。

伸也が野球部のサード側を走っている姿を確認しながら歩くと、校舎脇にある道場から剣道部のかけ声が聴こえてきた。

あの独特のかけ声、「面！ 胴！ 小手ッ！」である。

浩は正面玄関の扉が開いているのを確認すると、中をそつと覗いた。

道場独特の畳の井草いぐさの匂いが鼻につく。

三十畳程のスペースの広さで、浩の左手側に柔道部、右手側に剣道部が陣を取り練習をしている。

そこに青井 優はいた。

試合ではないので、面はつけていない。

本人だとすぐにわかった。

長い髪を後ろでくくり、一つに束ねている姿は凛々しい。

背筋がピンと伸び、彼女は上段からの打ち込み練習をしていた。

優は背が高く細身の容姿でありながら、振り下ろし止めた剣先の軌道は全くそれではない。

きつと彼女の筋肉は竹刀を振るためだけに鍛えた最小限の筋トレで身についたものであろうか。

ちょうど打ち込みの練習を終え、剣道部員は一列に並び礼をする。

優は浩を見つけると声をかけてきた。

「なんだ？」

あまりの挨拶に浩は拍子抜けする。
けれど、想定内の事である。

「なんか、かつこいいな」

「そんな事を言いに、わざわざここへ来たのか？」

ピシヤリと軽くあしらわれる。

優のこの言動はいつもの事。

学校内ではよく知られた、優の言動である。

人を寄せ付けないというか、彼女はそんなところがあった。

「いや、たまたま通りがかった」

浩は頭をポリポリと掻きながら小さく呟く。

「なら早く出たほうがいい。その靴でこの神聖な道場に行かれるとこちらも困る」

「えッ？ あっ」

浩はつい、練習見たさに靴のまま道場に入り、畳を踏んでいた。

「う、ごめんッ！」

慌てて靴を脱ぐと、優だけでなく、他の部員にも頭を下げた。

「それに早く帰ったほうがいい。あの野次馬達に囲まれるぞ」

彼女は剣道場にある窓へと指を指す。

そこには人目、彼女の勇士を見ようと男達がガラスに張り付いていた。

写真部らしき人物もカメラのシャッターを切っている。

「うわッ！」

「追い払ってもどこからか沸いてくる」

彼女はそう言って、その窓に向かって歩き始めると右手には握っている竹刀を片手で振り上げる。

突然、窓枠に向かって竹刀を振り下ろすと男達は散るよう逃げた。

「大変だな」

「いつもの事だ。……それよりいいのか？」

「なに」

言葉が出るより、優の指が道場の玄関先を指す。
そこには、先程まで練習で走りこんでいた伸也の姿があった。

「へえー。練習サボってナンパとはやるな浩」

「い、いや……ちょっと剣道部の練習見てたら青井に声かけられて……」

「私は声などかけていない」

優がそついうのが先か、彼女は道場奥の更衣室に向かって歩き出す。

「ほほっ。　そうか。　まあいい…なんか喉が乾いたなあ」

「あっ。　こっ、これは気がききませんで…買ってきます!」

「よしよし。　ここで待ってるぞ」

浩はそそくさとジュースを買いに購買部横の自動販売機まで走ろうとした時、優は振り返り一言。

「ふふっ。　お前達は仲がホントにいいな?」

浩と伸也はあっけに取られ、互いに顔を見合っ。

「誰が!」

「誰が!」

互いの言葉も重なる。

「ほらっ。　仲がいい」

浩と伸也は又、お互いに顔を見合わせ、すぐに顔を背けた。

放課後。

浩と伸也は汗で冷え切ったジャージを脱ぎ、鞆へと押しこむ。

校内では「蛍の光」が流れ始め、生徒に早く帰宅しろといわんばかりだ。

浩が部室を出ると、伸也は職員室に鍵を返してから追いかけるから！という言葉を残して校舎の中へと消えた。

浩は一人帰るのも寂しいので校門前で伸也を待とうと歩を進める。

校庭の桜は、まだ満開を迎えたばかりで散るには程遠い。

植物には命が宿っていると言われるが、まだまだ、生命の火は消えそうにはない。

けれど、もう一週間もすれば桜の花は、しとしとと艶やかな舞いを見せてくれるだろう。

それもまた一興だと、どこかの殿様のような考えに没頭し始めた頃、校門前にお姫様を見つけ足は止まった。

榎本 美歩である。

「おう！ まだ帰らないの？」

「う、…うん」

美歩は俯き気味に返事をする。

浩は暗くなつた空を見ながら話かけた。

「部活終わって帰るとこ？ 誰か待ってるの？」

「うん…。ユウを待ってるから」

「そっか。 榎本ってなんの部活してたっけ？」

浩は知っていた。

美歩がどの部に所属しているのかを。

「えっと……テニス部」

「そうだったっけ？ テニス部かあ」

話のネタに困りながら、頭をフル回転させる浩。

けれど、女の子とあまり話をした事がないので、話題はすぐに尽きた。

こんな時、ノブだったら色々な話題があるんだろうなと思いつつも時間だけが過ぎていく。

浩は榎本 美歩の事をよく知っていた。

同じクラスには高校三年生になって初めてだけれど。

榎本は自分の事をよく知らないだろうけど、浩は高校の入学式の日から知っていた。

「まだ、寒いから早く帰らないとね……。しかし、ノブの奴遅いなあ」

「安藤クンは金原クンを待ってるの？」

「うん。あいつ今職員室に部室の鍵を持って行ってるから。まあ俺は帰ってもいいんだけど、ノブが寂しがるから」

初めて榎本から話してもらえたことで、嬉しさを隠しながら浩は答えた。

「フフツ。そうだね。二人は仲がいいもんね」

「あつ！ さっき青井にも同じ事言われた。そんなに仲がいいかな俺たち？」

「仲いいよ。他の人がどう思ってるかはわからないけれど、私とユウの間で二人は仲がいいと思ってるよ」

「そうなんだ。えっ？ 俺たちの話なんかするんだ。どんな話してるの？」

美歩は急に顔が赤くなって、下を見ながら浩へと背中を向けた。浩はなんかマズイ事を言ったかな？と考え込む。けれど、彼女から返事は返ってこない。

来ない代わりに別のモノが返ってきた。

何かが、浩の頭に物凄い音を立て激突した。

「
つつ！　いつてえ」

「お前、何をやってる？　ミホを泣かしてるんじゃないだろうな」

「んなわけないだろうっ！」

青井　優は突然、革製の学生鞆で浩の頭を殴ったのだ。

美歩は二人を見ながらオロオロしている。

「ミホを泣かしたら承知しないぞ」

「泣かしてなんかない。話してただけ！」

美歩は、まだオロオロしながらポケットからハンカチを出し、浩の頭へと当てた。

「ミホっ！　帰るよ！」

「えっ！？　う、うん……」

美歩はハンカチを浩に渡したまま、そのまま持っていてという合図をし足早に歩く優の元へと小走りに急いだ。

「お前何してんの？」

「えっ？」

浩が後ろを振り返ると伸也が立っていた。

浩は決して忘れない、彼の口元が少しニヤけていた事を。

第七話「静かなる王」

朝のホーームルームも終わり、休憩時間に入った。

浩は眠い眼を擦り机に頭を垂れた。

昨日の夜は「ノブ特製テスト用紙」の続きを完了させるまで眠らせてはもらえなかった。

深夜四時まで浩と伸也は同じ時を同じ部屋で過ごしていた。

浩は眠い眼を擦りながら、自分と同じ時を過ごしたその人物は何故眠たくはなさそうなのかと思案していた。

きっとあいつは寝なくても平気な性格だとか、性格は関係ないのだが、全ては睡眠不足の為、彼の正常な思考を奪っていた。

「眠そうだな？」

席を立とうとしていた、美人な隣人は浩を見て思わず聞く。

「ああ…。昨日勉強していて…」

「べ、勉強！ お前勉強する奴だったのか？」

「俺が勉強したらおかしいか！？」

いくら眠くても、おかしな返答には返す元気はまだ残っていた。浩は頼杖をつき優を見返すと伸也がすかさず話に入ってくる。

「そそ。　おかしいだろ」

「フフッ！」

微かに聞こえる美歩の笑い声に浩は呆れた表情になる。そんなやりとりがいつまで続くのかと浩は嫌気が差したが、そんな和やかな一時は一人の教師の出現によって終りを告げる。

ガラツと勢い良く開く教室の前扉。

入って来たのは、落ち武者風に頭のとっぺんが禿げた教頭の姿だった。

「このクラスの青井　優という生徒はいるか？」

教室内の生徒の視線は一人へと向けらる。

おずおずと優は右手を挙手し教頭へと顔を向ける。

「ちよつと話があるので、今すぐ職員室に来るように」

それだけいうと教頭は出ていった。

教室内はざわめくのと同時に何が起こったのかと優へと詰め寄る。当の本人は何がなんだかという様子で先ほど、教頭が出ていった扉へと眼を向けていた。

「なんかしたの？」

「いや、何も……」

そうだろうなと浩は感じ、優は立ち上がると、とにかく行つてくるとだけ言い残し教室をあとにした。

次の授業が始まると何事もなく教師は授業を始めた。

きっと、教頭に青井が呼び出されているのを知っているのだろうと浩は思ったが、教師に問う訳にもいかず、端末を立ち上げ黒板に書かれている授業内容を写し始めた。

彼女が教室へと帰ってきたのは、もう昼が終わる頃だった。

彼女は沈んだ表情のまま無言で席へと着いた。

浩は自分の席へと着き、彼女のほうへと視線を向ける。

何が起こったのかわからないが、彼女が話をしながらないのだけは伝わってきた。

浩も何も訊かずそのまま端末を起動させると授業開始のベルは校内に響き渡った。

放課後。

今日の授業は終わり、端末内にあるファイルを整理しようと一人、席に着いたままキーボードをカチャカチャと叩く。

親友の伸也は「お先！」という言葉を残し教室を出た。

徐々に人の気配が消えていくのを感じながら、浩の意識はファイル整理だけに奪われていた。

いつの間にか教室内には自分一人だけ。

もう既に三十分の時間が経過していた。

急いでICカードを抜き取り、自分の腕時計型の端末へと乱暴に差し込むと席を立つ。

教室をあとにし、階下へと続く階段へと差し掛かると、そこに青井 優の姿があった。

「安藤。 ちょっと話があるんだが……」

「え!？」

突然、浩を呼び止めると階段に立ちはだかる優。

彼女は背が高い為、一段程下の段板にいるのだが、目線は浩と一色線に並んでいる。

浩は優に何を言われるのか心臓がドキドキと高鳴る。

この状況はひょっとしたら…誰もが経験する告白と言われる状況ではないかと顔を赤くする。

今まで、そんな状況に出会う機会がなかった為、どうしたらいいのか正直わからない。

誰もいない廊下に彼女の言葉ははっきりと聞き取れた。

「あの……。その……」

「え……。何？」

もじもじとしながら、彼女は言いにくそうに下を見ている。

やっぱりそうだと、浩は確信するが言葉が続かない。

しかも、同じクラスになったばかりで彼女の事はまだあまり知らない。

今まで彼女の事は噂と姿だけで知っていただけで、まだ知り合っただけだ。

そんな彼女の告白に、浩は胸が高鳴ると同時に緊張した。

「その。今晚ちょっと、学校に来てほしい」

「え？」

思いがけない優の言葉に、返事はできないまま浩は彼女の話に耳を傾ける。

「今日の夜、八時半にここに来てくれないか？ 一生のお願いだ」

「

「え！？」

彼女はそれだけいうと下を向いたまま浩の返事を待った。

一瞬でも期待した自分に、恥ずかしくなる浩。

告白ではない。

そして、深夜の学校に来てほしいと懇願する彼女。

そんな突拍子もない話に頷く必要もない。

けれど、青井 優の話し方には、何か切迫な状況が伝わってくる。

「なにかあつたの？」

一瞬だけ、浩をチラリと覗き眼を伏せる。

彼女は長い美しい髪を右手でサラとかき揚げ一言だけ。

「今はまだ言えない……」

ただ、それだけの言葉。

浩は彼女が夜の学校に来る理由を考えてみるが思いつかない。

けれど、その理由はきっと、さっきの職員室への呼び出しに関係している事。

それだけはハッキリと理解していた。

そして、何か問題だあるのであろう。

「いいけど。 伸也も一緒に行っていていい？」

浩の言葉を訊くと、優の表情はパツと明るくなる。

「構わない」

少し後悔したが、これを断れば優とは二度と会えない……。そんな気がした。

「それと。理由を言えるなら教えてほしい」

浩はそれが当然だという思いで、少し語気を強めて話した。

「……。わかった。でも、夜に会った時でもいいか？」

「うん。それは構わない。そして、何をするのかも教えて。犯罪の片棒は担ぎたくないから」

「フフッ。犯罪ではないから安心して」

浩は彼女の話の内容を聞き、犯罪ではない事に安心した。

そして、優はそれだけ言うと、階下へと急いで降りる。

その姿を見つめながら、一体、夜の学校に来て何をするのだろうかという疑問が頭から離れない。

そして自分の思い違いな状況に顔が赤くなるのを感じながら部活に行く為、急いで階段を降りた。

月夜に照らされたビルの屋上に男はいた。

男は金色に輝く月を眺めながら物思いにふけていた。

今まで生きてきて、一体何年、いや何千年、何万年の月日が経過したのだろうか。

もう記憶にある”昔”の記憶はいつの”時”の記憶かも定かではない。

けれど、”男”の記憶に残る唯一の昔の記憶は彼女の顔。

彼へと神から与えられた”人形”は無垢な意思を無邪気にさらけ出す。

記憶と呼べるほど、その形は原型を留めてはいないが、男の中には”彼女”が確かにいた。

彼女の”名前”さえも、もう覚えてはいないが。

男の”心”の中には彼女の姿があった。

ビルの屋上で彼は思う。

きっと彼女も同じ”時”を過ごしている筈だと。

それが”自分”と”彼女”に”神”から与えられた使命だという思い。

曖昧な記憶を確かに手繰りよせながら男は”今”も時の中を生きている。

そして”彼女”と出会うことを確信していた。

男は、今日も”人形”を作り上げる。

それが”神から与えられた使命”であると確信していた。

”全ては彼女と自分に神から与えられた使命である”

その思いが彼の意志を、前進へと掻き立てる。

「全ての準備は整った……」

と一人呟き、屋上から彼は姿を消した。

第八話 「侵入」

夜八時。

草木も眠る……という時間にはまだ早い。

浩と伸也は、予定していた時間よりも三十分早く正門前に到着した。

当然の事ながら伸也は浩に、この行動の意味を執拗に訊いてきた。浩自身も何かなんだかわからない為、曖昧な返答を繰り返した。けれど、正門前に優がいるという事は間違いないので、それだけは伝えた。

そして、もう一言だけ。

彼女に何かがおきた

伸也の顔色はすぐさま変わり、わかったと一言だけ。

二人は約束時間までに食事と風呂を済ませた。

伸也は今日は帰るフリをし、外で待機。

浩も「今日は疲れたから早く寝る」とだけ両親に伝え、母は何か言ったが浩の耳には届かなかった。

そして、黒のジーンズとパーカーに着替えて、ダウンジャケットに身を包み、部屋の窓から脱走を図る。

夜に部屋から出るのは中学生ぶりだなと浩は考え、雨樋伝えに階下へと降りた。

音を立てない様に門扉を開けると、青のジーンズに黒いハーフト姿で白い息を漏らしながら伸也が立っていた。

学校までの道のりに二人の間に会話は無く、ここまで来てしまっていた。

二人は優に何が起こったのかという疑問ばかりが現れ、そして答えのないまま疑問はモヤモヤの薄暗い霧の中へと消える。

夜の学校に一人で向かう勇気がない浩は、安心したのとこれから何が起こるのかという不安が大きくなる。

「で？　ここで待つてれば青井が来るの？」

「来ると言つてた……」

伸也は呆れ顔で月夜の空を呆然と見つめる。

四月だといつても夜の冷たい空気が肌をさす。

道路から見る校舎は、月夜に照らされ不気味に青白く輝く。

その校舎に”精気”は無く、まるで死人の様な蒼白の色を浮きだたせる。

幼い頃に怪談話には学校での話がつきものだった。

浩は”お化け”とか”幽霊”とかが大の苦手によく耳をふさいで怪談話を訊いていた。

隣を見ると伸也はワクワクしながら、好奇心瞳で話に夢中になっている姿が、浩の脳裏に焼き付いていた。

きつとこいつは幽霊なんて信じてないんだろっ……そんな事ばかり考えていた。

大きくなった浩は、さすがに幽霊やお化けは信じてはいない。けれど、こうして夜の校舎の中へ足を踏み出そうとすれば、少しは幼少の頃を思い出す。

「今現実には」お化け」や」幽霊」は、この世に存在してはいないだが……。

この間テレビで流れていた映像が頭をよぎる。
いや…それはない……。

”あの、存在はあの場所から離れることは出来ない筈だから

”

そう念じると浩は少し気が楽になった。

「もう八時半だと、青井来ないな？ ホントに来る？」

浩は突然の問いに少しビクツとなり、曖昧に頷く。

「でも、何があったのかな？」

「ん？ わかんね。でもかなり困った顔だったんだよね？」

浩は何気に呟くと伸也はそれに答えた。

けれど、浩にも伸也にもその答えは見えてはこなかった。

それから十分後に彼女は来た。

遠目に見た彼女は少し……というかなり元気がないのが見てわかる。

そして、彼女は浩と伸也の前に来ると突然頭を下げた。

「こんな事に付き合わせて、ホンっつとにゴメン」

二人はポカンとお互いの顔を合わせ同時に言葉を放つ。

優はグレー色のキュロットスカートに黒のレギンスに大きめのダウンコートを羽織っていた。

下を向いている彼女の整った顔に、自慢のロングヘアが覆い尽くし、どこか悲しげな表情を映し出す。

「いや……何するかも知らないし……」

優は顔を下に向けたまま、どうしたらいいか困っていた。

「まあ、何をするのかわからないけど、ココに集合って事は校舎に侵入するんじゃないの？」

優は黙った頷く。

「そ、そうだよな……。で」

「事の経緯は、歩きながら話す」

優は浩の言葉を待たず言う。

「じゃ、行こうか」

伸也の一言と共に、三人は深夜の学校へと侵入を始めた。

第九話「二人の誓い」

優の身長は浩よりも高い。

そして、伸也の身長も浩よりも高い。

伸也と優の身長差は僅かではあるが、伸也の方がおよそ五センチほど身長が高い。

浩の身長もそれほど低くはないが、それでもこの二人に比べたら遥かに低く見える。

そんな二人は、校門のゲートを文字通りヒラリと乗り越えた。

この二人の足には、きつと見えないスプリングが入っているのであらうかと錯覚する。

浩がゲートを乗り越えたと五歩先くらいに優。

その後ろに伸也。

そして伸也の三歩後ろに浩という並びで校内へと降り立つ。

浩の心臓はバクバクと鼓動が高鳴るのが自分でもわかる。

”深夜の学校に侵入している”

このシチュエーションに心踊らない学生はいないであろう。

浩は今回の目的も忘れて、ウキウキしているが”奴”の一言でそんな気分も吹き飛んだ。

「で、ココでなにをするの？」

伸也は優に向かつて、もつともな疑問を投げる。

優はダウンジャケットに手を入れたまま、後ろを振り向き、又、前へと向きなおして歩を進める。

「うん……そうだね。まあ歩きながら話す」

伸也も納得した様子で優の後ろをついていった。

浩もそれに習って歩き出す。

鍵が閉まっている筈の校舎。

どこから侵入するのかと浩は思案するが、その必要はなかったようだ。

優はこつちだと二人に手招きした。

ついて行った先は校舎裏の一階女子トイレの窓であった。

優は鍵が掛かっていないのを確認するとゆっくりと障子を動かした。

「放課後に鍵を開けておいた」

「準備がいいことで」

浩は関心が半分、呆れたのが半分。

優を先頭に浩、その次に伸也と順番にトイレへと侵入。

真っ暗な夜の女子トイレは余計に不気味な感觸を映しだした。

優はトイレのドアをそつと開けると廊下へと進む。

ダウンジャケットに手を入れたまま、優は浩と伸也に一度振り向くとゆつくりと話を始めた。

「全ての始まりは二年前」

今から二年前。

高校一年生の入学式。

互いに同じ高校に進もうと二人で頑張ってきた優と 美歩。

二人は幼少の頃から同じ時を過ごしてきた。

気の弱い美歩

勝気な性格の優

全く正反対の性格ではあるが、きっと 天秤が釣り合う様に、二人のバランスは調整されていた。

意識はしていないが気がつけば、お互いにいつも一緒の時を過ごしてきた。

その始まりはいつからだったかも覚えていない。

けれど、二人は約束通り、同じ高校に入学できた。

二人は嬉しさのあまり涙した。

合格発表の日は、二人で朝まで一緒に過ごした。

それほど、同じ高校に行くことを二人は希望していた。

入学式の日。

その日は朝から雨が降っていた。

昨日の天気予報では、雨は昼頃には止むであろうと、キャスターはニッコリ微笑み告げたが結局、夜遅くまで止むことはなかった。

無事入学式を終え帰宅し、二人は美歩の家に集まった。

美歩の家に宿泊する予定だったからだ。

鞆にギツシリと明日着ていく制服と下着等を詰めて、優は美歩の家にお邪魔した。

共に食事をし、風呂に入り、そして、美歩の部屋で朝までお喋りに花を咲かせようとしていた。

二人は布団に入り、電気を消す。

「あつ！ 学校に忘れ物した……」

唐突に美歩は小さく叫んだ。

真っ暗な部屋にやさしい声が軽やかに響いた。

「な、な、何突然」

「ご、ゴメンツ！……学校の理科室にデジカメ忘れてきた」

「忘れ物かッ。なんだ事件かと思った……」

「……事件かも」

「だってデジカメでしょ？明日でいいじゃん。今日は寝るよ」

「い……や だって、二人の写真が入ってる」

ゴロンと横を向いた優は、呆れ顔で美歩にいう。

「デジカメぐらい明日でいいよ。誰かに盗られたら私が代わりに買ってあげるから。今日はもう寝よ寝よ」

「い、いや。この間撮った下着姿の写真とか……」

「……」

「ま、まずいよね。さすがに」

「マズイに決まってる！今から取りに行くよ！誰かの手に渡る前に……」

優はガバつと起き上がると、すぐさま着替え身支度を整え、美歩と共に夜の学校へと向かった。

第十話「もう一人の侵入者」

「それから二人で、今日と同じ様に深夜の学校へとむかったんだ」

優はそういうと一階の突き当たりにある階段室から上階へと向かう。

誰もいない校舎に浩と伸也、そして優の足音だけが静かに反響する。

浩はふと伸也の顔を見た。

伸也はいつもの緩んだ顔をしていない。

何故か奇妙な不安に浩は駆られた。

「どした？」

「ん……？ いや……。なんか顔についてる？」

浩が声をかけると、伸也はいつもの調子でふざけた。けれど、伸也は真顔に戻ると優に一言。

「青井？ 階段上がってどこまで行く？」

「四階……。 四階の理科準備室に向かっている」

やっと行き先がわかると、知っている場所だけに道のりは短く感じた。

理科準備室の場所は、四階の階段室から渡り廊下を渡って向かい側にある校舎の一番突き当たりにある教室だ。

一つ手前の理科室の実験器具やら標本やらが置いてある教材の倉庫に今はなっていた。

出来れば、こんな時間に一番行きたくない教室である。

そして、この”闇”に一番似合う教室……。

「げっ！ あんなとこに行くのかよ。 いやだな。 そんなと

こに行ってどうする？」

「……行けばわかる」

優はそれだけいうと、止めた歩みを始動させる。

そして、再び話の続きを語りだした。

優と美歩は、学校へと到着するとゲート乗り越えた。

優はどこから校内へと侵入するかと考えるが思いつかない。

やはり明日の朝早くに登校し、デジカメを回収したほうがいいかと思案する。

優の思案はなんのその、突然美歩は正面玄関へと向かうと、両開きの扉に手をかけ、開く方向へと体重をかけると動くはずのない扉は動き出した。

「え!？」

「ちょ、ってなんで開いたの？」

扉を開けた本人が一番驚く。

優は美歩に歩み寄ると彼女に一瞥くれ、校舎への一步を踏み出した。

校舎内に漂う、冷たい空気が肌をさす。

こんな事ならもつと着込んでくればよかったと優は後悔した。

なんとしても早くカメラの回収をおこない帰宅したいと強く願う。四階へと向かう優は無意識に美歩の手を握った。

「……ユウ？ 怖い……？」

「……??」

美歩は怖くはないのか……？ 美歩は彼女の言葉に少し驚きを隠せないでいた。

そうだった。

彼女はこういう怖い場所が大好きだった。
幼少の頃から”お化け屋敷”に入っては、怖がるのは優だけ。
そして「怖い……？」などと、いつも訪ねてくる。

「……怖いに決まってるでしょ」

女二人でこんな場所。

我慢しつつも優は、ここまで来てしまった以上もう戻れないなど
と考えていた。

なんとしてもカメラの回収をしなければと二人は意気込み歩を進
めた。

階段を一步一步、確実に上がっていく二人。

急いで出てきた為懐中電灯を持ってくるのを忘れたことを後悔し
た。

何事も無いまま、お互いに無言のまま理科室の前へと到着した。

「と、ところで、なんでこんなところにいたの」

「う、うん……。入学した記念に校庭の風景を写真撮影しとこ
うと思って。ちなみに中学生の時も、入学式の日と卒業式の
日に撮影したよ」

「そ、そう……。これからは忘れないでよね」

「ゴメン……」

優はゆっくりとドアを開ける。

ガラガラと木製のドアがこする音を訊きながら扉を開くと夜空に輝く月が教室内を照らす風景を見る。

誰もいないのを確認してから二人は理科室へと入った。

「で、どこに置いたの？」

「……窓側の一番後ろの机の上……かな？」

教室の入り口から目を凝らし二人は机の上を睨んだ。
けれど、そこには何も見えない。

「ホントにあそこに置いた？」

「……うん……。多分……」

か細い声で小さく美歩を頷いた。
二人でその席の机の上と中を除くは何も無い。
もちろん、椅子の上にもない。

誰かに拾われたか……。

優の脳裏には男子生徒がデジカメを拾って写真データを見て、ニヤニヤしている姿が浮かぶ。

イヤだ！イヤだ！イヤだ！と心の中で連呼し顔は青ざめた。

「大丈夫？ ユウちゃん……。 顔色悪いよ？」

そりゃ、あんたのせいだよと心の中でセリフを吐き、そんな事ないよと答えた。

途方に暮れた優は窓の外を見る。

何かが動いた。

やばい！ と自分の中の何かが、最大限のボリュームで警告を発する。

見えない様に窓の敷居に顔を隠すようにしゃがむと、立ったままの美歩の頭を慌てて下へと押し込んだ。

「イタ〜イ……」

「シっ！ 誰か来る！」

えっ！ という美歩の声と警告音は耳鳴りの様に優の中で響く。

校舎内の音へと耳を澄ます優と美歩。

カツカツという革靴の音が廊下に反響する。

尚も静かに耳を済ます優はある事に気がついた。

こっちに来る!!。

明らかに四階へと歩いている足音は、少しずつだが音は大きくなっている。

思いすぎならいいが、一応用心はしておかなくてはならない。

優は美歩に机の下へと隠れることをさせると、自分も机の下へと身を潜めた。

尚も響く靴音は迷いなく、こちらの方向へ向かっている。

手にじんわりと冷や汗をかきながら、優は少し震えた。

さつき窓から姿を見られたのか？ いや、そんな事はない筈。

不安に駆られた感情は、思考を悪い方向へと誘われる。

気をしっかりと持たなければ……。

いざとなったら自分が美歩を守らなければならない……。

近寄って来たら、体当たりでもしてふらついたところを、教室後ろの清掃ボックスからホウキを取り出し、それを武器に相手と対等に闘えるだろうか？

頭の中でシミュレーションを何度も繰り返す優。

そんな願いも虚しく、謎の侵入者の足音は理科室の扉の前で止まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6376o/>

Another one

2011年10月6日15時58分発行